

最近のトピックス**第5回国際口腔病理学会, 日本開催をめぐって**

口腔病理学教室

福 島 祥 紘

近頃は国際学会を開催するといっても、大して珍しいことでも、話題になることでもないようだ。しかし、歯学部基礎講座単独の国際学会の開催は日本では未だなかったことは確かである。

元来、歯学部基礎講座は連合して歯科基礎医学会というユニークな学会をもっているが、単独講座の学会はなかったのである。例えば、わか教室の場合、医学部を中心とする日本病理学会はあっても日本口腔病理学会はない。これは、解剖も生理・薬理・生化も同じである。

確かに基礎研究のみに徹すれば、現在の体制でもそれ程不利益は出ないかもしれない。しかし、病理学の場合、診断学という一面も否定するわけにはゆかないのである。最近の口腔外科学を含む臨床の進歩とあいまって、口腔病変の診断基準の統一や診断技術の進歩を求める要請は極めて強い。更に、世界的にも地理病理学の立場や、種々の口腔病変の疫学、それに各種病変の登録作業からの各種の要請は、無視できない勢いとなってきている。つまり、これらの要請に応えるだけの為でも、口腔病理学者の全世界的な会合が必要になってくるというわけである。

国際口腔病理学会はそのような理由で、数少ない全世界の専門家を集めて10年前に第1回会議をスウェーデンのヨーテボリ市で開いたのであった。会議は大成功であった。各国の中では少数にすぎた為に学会組織をつくれないう専門家達にとって、この会議は口腔病理学のアイデンティティーを再確認させるものであったからである。第2回はオランダ、第3回は英国で、第4回は米国のフィラデルフィア市で行なわれ、次第に欧米中心から世界的規模の学会へと発展をとげつつある。

わか教室では、そのすべての学会に演題をもって参加してきたが、矢張り、日本開催の夢が第1回以来の参加の中で膨らみつけてきたのである。欧米からの距離や我々の学会運営の経済的基盤の弱さを考えると、勇気も

にふりがちであったけれども、日本の現状を考えて、今、日本開催はむしろ必須であるという判断から欧米からの開催要請に応えることにしたのである。石木教授を組織委員長に、当教室で事務局をひき受けて現在苦闘中である。

第5回のこの学会は、1990年(平成2年)7月2日より4日間にわたって東京の日大会館(市ヶ谷)で開かれる。参加者は25ヶ国、400人を予定している。特別講演が3題、シンポジウム2題、サテライト・シンポジウム2題、スライドセミナー(CPC)1題を含めて、多くの口演・示説と多彩なプログラムとなっている。

WHOの診断基準が全身の各臓器毎に出版されているのは御存知の方も多いであろうが、このうち歯原性腫瘍(Pindborg教授)と唾液腺腫瘍(Seifert教授)の改変が現在行なわれており、この学会の中で発表されることになっている。

口演・示説共に、歯周病変や硬組織疾患、インプラント生物学も含めた広い分野の発表も受付けることになっているので、是非皆様の参加を待っている次第。尚、学会の非会員も同じ資格で参加できるのも、今回の特徴である。

更に学会の後、各地の歯科大学で多くのサテライト・セミナーが予定されている。教科書でおなじみの有名な教授は、殆んど来日することになっており、当歯学部でもカナダのMain教授(学会会長)、オランダのvan der Waal教授、南アのShean教授らがセミナーに出席する予定になっている。また、この機会に「アジア」の口腔病理を考えるという目的で、中国のWu教授をはじめ、タイ、インド、韓国、バングラデシュの口腔病理学者を招待する企画も着々進んでいる。

しかしながら、当教室がこのような本格的国際学会を運営してゆくには当学部全体の応援が切に望まれるのである。学部大学院の学生は当日の運営で、各関連教室の研究者は演題申込みで、どうか御協力をお願いしたい。演題〆切りは、3月31日。サーキュラーを望まれる方はどうぞ申し出て欲しい。